

2023年6月学会ワークショップ：オープン
2023.6.24（土）13:00～15:00

「教育研究 50 年を振り返って」

講師： 明石 要一(千葉大学名誉教授)

司会： 土田 雄一(千葉大学教授)

記録係： 清 文枝(テレビ朝日アスク講師)

参加者：26名（学会外からの明石先生の教え子を含む）

注；当日は、明石先生がご自分の研究歴等について記されたレジュメを用意されましたが、誌面の都合で後半の質疑だけ掲載させていただきました。なお近著「教えられること、教えられないこと」2021.3（さくら社）にも関連する資料が掲載されております。

-<明石要一先生のご発表に続いて>

司会（土田雄一）

以上は、子どもの姿を量的に調べ、さらに聞き取り調査などで分析する、社会の変化と子どもの変化を結び付けながら学校、教師の在り方を改善していく提案をされてきた明石先生のお話でした。以下、質疑、感想などをみなさまにお願いします。

白石 収：明石研究室卒業生です。先生は、量的調査とヒアリング調査、体験活動など測量しづらい分野もやってこられた。ご苦労した点など伺いたいです。

明石要一：人生を振り返ると、学校教育よりも地域の中で人間性や社会性を培ったように思う。子どもたちの遊びが変わってきた。それは、学校組織が大きくなり、家庭が小さくなり、地域が希薄になった。だから、地域の遊びの変化、子ども会やボーイスカウトなどの研究を千葉大学でもやってきた。経験的に「放課後が大事」というのは話に出るが、エビデンス的には難しかった。それで、横浜の放課後のキッズクラブ、調査項目を作り、どのような効果があるかを調べてきた。アメリカのように、同じ集団を10年20年追っていくという継続調査は必要だと思う。ふりかえって、幼児期、児童期の遊びは非常に大事。遊んでいる子供は自己肯定感が高い。没頭できる人、自分で遊びを考える人の方が自己肯定感が高いというデータが出てきた。そういう意味でも放課後の「体験」は重要だと考えている。

司会：現在子どもの放課後はどうなっているのでしょうか？放課後体験。危惧されている部分かとも思います。

岩瀬伸子：明石研の出身者です。千葉市の放課後子供教室の支援事業をしている立場から。総合支援コーディネーターとして、18校で活躍するボランティアをバックアップしています。子どもたちのいろんな体験活動を通して自己肯定感を高めるとか、経験値をあげて、その子にとって何かいい

きっかけを持ってもらいたいという事をやっている。千葉市は、首長がこうした活動を大事だと捉えて予算化してくれているのでうまくいっている。子どもたちにとってもすごく楽しくて学びの場になっている。一方で学びの場もできている。

司会：最前線で子どもと関わっていて、変化の有り無しなど感じるころがあれば。

岩瀬信子：教員を30数年やって放課後を数年。経験的なものでしかないけれど、ちょっと前までは塾の存在、ゲームが増えてきたといった変化が大きいけれど、子どもって放課後に体験することが大事だと思う。変化については、はっきりは言えない。感覚でしかわからないので・・・。

司会：体験の大切さという事で考えると、コロナの3年間で思うような体験ができなかった影響について何か感じるころはないでしょうか。

明石要一：学校行事がない。教育実習も画面を通しておこなった。学祭も全部消えた。行事を通してリーダーシップ、フォロワーシップを経験できたのが出来なかった。3年間で退学が一桁か二けたになった。つまり仲間づくりができない人は2年間通えないという事が見えた。

勉強会をやっているが、学校の先生方が、行事をやっていないので非常に戸惑いがある。地域で言うと、夏祭りなどをやっていないので、休み明け太鼓の指導などがまた大変。これまで連綿とつながれてきたものが伝わっていかなくなった。1度楽をすると「もうやりたくない。」という感覚が先生たちの中にも出ている。目に見えないカリキュラム・地域活動が消えてしまった。

司会：学校が行事を失った。労力が戻らないのではないかと。労働力不足も一つのキーワードになっている。学校は全ての子どもたちが受けられるもの。放課後は一人一人体験が違う。

学校での体験活動について意見がいただけたらと思うが・・・。

石井雅代：千葉市立の小学校に勤務しています。明石先生の研究テーマはまなざしが優しいし、学校現場だけではできない体験が子どもを育てているなど感慨深く聞いていました。私は千葉市の学校に勤めています。放課後サポートも充実しているが、放課後の子どもたちについては心配。習い事に追われているし、放課後もアフタースクールに代わっていくと、公演で自由に遊ぶという事が減っていくのではないかなと思う。最近は公園起きたトラブルを学校の先生たちが解決しているケースが増えている。子どもたちが遊んでいるのは嬉しいことと感じるが・・・。特別活動に関しては、私の学校では先生方は運動会がとても好きだったという事がわかって、他校が午前中だけで終わっているところ、うちの学校はしっかりやった。学校行事が好きで先生になっているという人も多かった。理論で学べないことを提供するのも学校の使命かとも思う。子どもが好きで、自分の子ども時代にそういう場で教わったことを教えたくて先生になった人が最後まで残ってくれる。体験活動について非常に大切なことだと、コロナを経て感じている。ベテランは体力的にきついか、仕事もうまくいかないという先生は、子どもたちの体力に対して心配だとかといった理由をあげるが、水泳でも運動会でも音楽発表会でも熱心な先生たちはいて、そちらに期待していきたいと思う。

司会：子どもの体験とレジリエンスについて、上島先生お願いします。

上島 博：定年退職して数年。非常勤で少しは働いているが、「体験」という事は大事だなと思う。レジリエンスにとっても「体験」は、その人の物事を考える核になっていくものだと思う。たまたま1年生に補充教員で授業をした。1年生だと遊ぶのが好きなので、ひらがなカードを使ってちょっとしたゲームをした。言葉集め。単純なゲームなのだが、キャーキャー言いながら対人交流を深めていくという活動ができた。密になっている子を見て「コロナではできなかったな」と感じました。特に小学校段階では、体を動かしたり友達と交流するのが大事だと思う。小学校の集団教

育の中で、子どもたちが直接いろんな役割を担ったりするのは諸外国あんまりされていないが、大事にしていきたいなと思う。

司会：いろんな役割を体験しながら培ってきたものが将来役に立つだろうと思う。中学の現場ではどうなっているのでしょうか。

小川幸男：今の中学生。コロナの影響は非常に大きいと思っている。太田区ではストレス調査で、コロナに入ってから、ストレス症状がすごく増えているという数字が出ている。今年卒業した子は3年間がコロナ。今はいつてきた子たちは4・5・6年生がコロナ。影響は4～6年の方が大きいかと思ってみている。ギャンググループの中で断り方とか、人間関係の距離感を学ぶのだが、それが身についていないという感じを受けている。距離が近くなりすぎる子は相手を傷つけてしまったりがあるし、距離が遠い子はグループに入れないといたりがある。昔は反社会的な行動になっていたが、ここ数年は内向き自傷などになっていたのが、コロナで一気に加速した感じ。不登校はいまや10人に一人。原因が特にない、そういう感じのものが増えていると思う。中学校では、部活動で放課後の面倒を見ている側面がある。そこから外れてしまった子をどうするか。昨日も、公園で子どもたちが遊んでいて他の学校の子どもたちもいると、中学にとっては問題で「立ち寄りないうように」といった風になってしまう。部活の指導体制の改善が言われているが、どうなるか見えない。

川口浩貴 時代や世の中は大きく変わっている。インターネット出現から25年以上。今はチャットGPTとかが全盛。教育って今からどういう方向に向かうのか、そもそも教育は意味があるのか、そんなことを思う。教育全体というとき大きくなりすぎるがこう公教育全体に限定してもいいが、どういう方向に向かうのだろうか。

保坂あけみ：20年近く、子育てサークルの活動をしている。今は殆どの方が保育園を利用しているが、私の頃は母親が居場所がなかった。母親にどういう居場所が必要なのかを考え続けた20年。公教育のこれからの在り方というとき、今地域がなくなってしまったので、小学校中学校が地域の中心となってコミュニティーの中心になり、子どもたちにとっては、安心して体験ができる場として、どんどん重要になってくるかと思う。

明石要一：これまでの話の中で、4～6年の時にコロナだったという子たちが人間関係の距離が保てないというのが気になる。日本人固有のように思う。社会に出て行った時に、とまどわなくて、色々な違いの中でどうやって生きていくのか。日本では通用するんだけど、世界に行った時に通用するのかと思う。人間における距離感とか多様性とか。日本の同調性の強い文化で育った子供たちが世界で戸惑うのではないか。行事というのは、同じ日本人でもぶつかり合う。ぶつかり合って合意形成をしていく。それが弱いのではないかと思う。

水澤豊子：国立青少年…で子どもたちの体験活動をやっている機構にいる。28施設あって、2016.17年、沖縄の施設に勤務。渡嘉敷島。子どもは高校になると島を出る。そこで2年間過ごした。そこでは、幼児から中学生まで放課後皆で遊んでいる。お祭りも大人子ども一緒に作っている。2年間いた中で、スマホでゲームをする子が増えたり、一緒にいても画面でゲームを見ている子が増えたという変化はあった。今、コロナを経てどうなっているかということに興味があるとともに、ああいうところを計画的に調査しておけばよかったなと後悔している。仕事とは別に、ライフワークとして、子どもたちに遊びのきっかけを作るという事をやりたくて活動している。大人のきっかけ作りは大切だと思う。教育に関係・関心のない人たちを、どう巻き込んで子どもの支援をしていくか、それをネットワーク広げながらやっていきたいと思っている。明石先生には、現場で子どもたちの実態を調査するうえで大切にしてきたことがあればお教えいただきたい。

明石要一：量的な面と、観察しながら一人一人を見ていくというのが大切。定点観測でずっと続けていくといい。15名から30名くらいの小さなグループでいいから続けていくことが大事。

司会；世界で飯が食えんのか、という話ですが、視察で東南アジアの子ども達を見た時に、東南アジアの子どもの方が日本の子どもよりよっぽどよく学んで努力していて能力も高いなというのを肌で感じました。日本はこんなので大丈夫なのかなと思います。留学する学生も減っているという事も聞いている。自分の力で何かをしようとする力が弱っているようにも思う。そしてもう一つ、国内での多国籍化も考えていかなければいけない。コロナ下で日本に来る留学生は減ったが、学校に在籍する外国人の子供は増えた。これにどう日本社会が向き合っていかなければいけないのか、課題だと思っている。今までは自分と同じような人たちを相手にしていればよかった、これからは多様な人と対していかなければいけない。自分の息子は2歳半で南アフリカにいました。彼には人種差別の意識はない。自分にとっていい奴か嫌な奴かしかないのだが、それって、今後の日本人に教育に大事なのではないかと思う。理屈ではなく実感としてが、大切だと思う。

石井幸男：(NECグループ勤務) コロナの影響で大学生がコミュ力低下しているという話があったが、会社でも新人さんが入ってくる。今年の新人は3年間リモート授業などを受けていたメンバーが多い。コミュニケーションがとりにくいんじゃないかという話もある。今後もっと影響が出るように思う。社会人になると、人の考えていることを察するというのはとても大事で、それは小学校の時から感じて動いているところがあると思うのでコロナの影響は気になる。あと、IT技術が進んできて、いろんなところでAIがつながってきている。子どものころから慣れ親しむのはいいが自己判断出来なくなる子どもが増えてくることを懸念している。会社の中でも自己判断ができない社員がたまにいる。子どものころから自分で物事を見て感じて、判断していくという能力が養われにくくなっている環境かなと思う。子どものころからの人との関わりは重要なんだと思う。

横山駿也：明石先生の話について、深谷昌志先生、和子先生はどう見られたのかと思った。大先輩として「これはいかんよ」「ここは優れているよ」という感想を深谷先生たちから聞きたい。あと、私も若い人たちもコミュニケーションは気になっている。私は地域による教員の気質の違いを感じている。大阪から向こう関西圏は物おじしないしよく喋るし元気いっぱい泣き言を言わない。関東圏の先生は物事を生真面目に考え、上下の並びでものを見るような感覚があるのではないかなと思う。関西のエネルギーが一番日本人を強くするものではないかと思う。東京のテレビをやめて、関西のテレビ局がイケイケどんどんの番組を作って関東の縦社会を潰すのがいいのではないかと思う。

司会：OWN YOUR RISK 自分で決めて自分で責任を負う。心に残っている言葉です。

そのサイクルがしっかり身につけていくことが大事ではないでしょうか。

白石 収：今現在通信制高校サポート校というところに勤務しています。通信制高校は学校数生徒数とも増加傾向が変わらないです。GW開けも、通信制高校にどんどん生徒たちが転籍をしている。新生入生として入ってくるのは、中学で不登校、或いは学力が足りないという生徒です。教育、高校は特に、いろんな形があって変わっていくんじゃないかと思う。

今の高校で「マスク外してください」というと学校に来なくなったりする。指名すると学校に来なくなったりする。そういう子どもたちが長い人生、生活していかなければならない中で、少しでも元気になってもらえるようにお手伝いをしている。

子ども支援学会は小中の先生が多いが、高校は移行期。社会に出るための準備をする段階として役割を果たさないとと思う。

深谷昌志：アメリカやヨーロッパと比べて日本にはアフタースクールがない。あっても、内容が貧困です。アメリカでは、いい地域だと、学校は教えるところ。子どもたちが自主性を重んじるとしたら別の場所という考え方で、子どもたちが体験できる、いろいろな施設が用意されています。そこで指導員がつきながらいろんな体験ができ、夕方親が迎えに来る。こうした試みは今多くの社会では広まりつつあります。やはり、子どものアフタースクール。贅沢な感じですが、そういうものの充実を大きな方向性として考えていく必要があるのではないかと思います。ただ子どもが遊べばいいというものではない。子どもたちが中心となって動ける装置を用意しなければいけないということを考えました。

深谷和子：「教え子」という言葉がありますが、教え子はしばしば教師の中ではいつまでも、20代のママに鮮やかです。でも今日、明石先生のレジュメを拝見して、いつの間にかこんなに立派な先生になられたんだと感慨しきりでした。

今日は学校の先生方のご参加が多いので、子どもの成長を学校文化の中でどう保障していくかにみなさまの興味が集中していたと思います。しかし、夫の事例をお話ししますと、彼は子ども時代は住まいの近くの海で、仲間たち泳いだり、貝を採ったりの日々。戦後の食料難時代では、親のために庭に畑を作ってトマトを育てたりの労働。小学生時代は草野球に明け暮れ、中高ではバスケットの部活に熱中。勉強どころではなく、そうした体験の中から身に着けてきた力が自分の中で大きかったのではと本人は言っております。また、大学でもサークル活動に熱中。その中で、院に進むためには学力が及ばないと知り、猛烈に勉強を始めてどうにか合格。それが研究者としての今につながっているのかもしれませんが。学校文化の中での成長以前に、幼児期や幼稚園以前の段階でも、目いっぱい自然の中で遊び、仲間との群れ遊びで過ごす体験の大切さ。ない物ねだりかもしれませんが、そうした力、いわば生きるためのガッツは、学校で学ぶ以前の成長環境の中でも生まれるのかもしれませんが。そうした生活環境を社会が用意することが、アフタースクールの大切さが、子どもの成長のために社会的課題になるのではないかと思います。

明石要一：昌志先生も和子先生も、もう80台。私はマスター時代から数年、新検見川でアパートを借りて週3回、深谷家で夕飯をご馳走になってきました。いわば書生として鍛えられた日々でした。こうした縁があった方とのつながりによって自分の今日がある。学校生活も否定はできないが、それ以外の生活の中で人と人とのふれあい、「縁」作りをこれからも大切にしていきたい。

自分の今後については、千葉が元気になればいいかなと考えている。千葉には人口1万人以下の町が9つある。そういうところには子どもが少なく、子どもたちはみんな大人社会の中で過ごしている。そうすると、ガッツとか耐える力とか育ちにくい。体験ができない。そこで、やっぱり教育で地域を元気にするという方向性を考えて、子どもが元気で育つにはどうしたらいいかを考えていきたい。1万人以下の町がまず元気になればいいかと思って、これから活動していきます。本日は、みなさま、ご参加いただいてありがとうございました。(了)